

<実践報告>

良好な人間関係を育む「ありがとう大作戦」
 —友の良さを感じ、その良さを取り入れ、
 自ら実践していこうとする子どもを願って—

草間信一 安曇野市立堀金小学校

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

The *Arigato* 'Thanks' Strategy for Fostering Good Human
 — Relationships among Young People :
 Helping Children Discover and Adopt Their Friends' Good Attributes —

KUSAMA Shinichi: Horikane Elementary School, Azumino City

DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	本校の全児童を調査した結果、40%が人間関係について悩みを持っていることが明らかになった。その多くは「友達に対して言いたいことが言えない」「友達が何を考えているかわからない」などのコミュニケーションに関するものであった。 そこで「ありがとう」という気持ちを声に出して伝えあう活動を「ありがとう大作戦」と名付け、全校児童による児童会活動の中心的活動として位置づけた。この実践による効果を児童の記録をもとに考察する。
キーワード	児童会活動 ありがとう大作戦 コミュニケーション
実践の目的	集団生活の場である学校生活において、友だちに対して「ありがとう」と伝えたいことがある児童が、テレビ放送によって全校児童が聞いているところで思いを発表する。この活動を年間10回実践した。
実践者名	草間信一（第一著者と同じ）
対象者	長野市立通明小学校 全校児童
実践期間	2008年4月～2009年3月
実践研究の方法と経過	本実践研究を全校児童会活動の中心的活動として位置づけ、年間10回実践した。意外なことに低学年の児童が積極的に発表し、この大作戦を盛り上げてくれた。
実践から得られた知見・提言	「良好な人間関係を育む」ために効果があった。この大作戦では必ず発表者が存在し、相手が存在する。テレビ放送で紹介してもらい「ありがとう」を伝えられた児童は全校から認められたと同じことになる。

1. 課題

筆者が2007年に行ったアンケート調査では本校児童の40%、高学年については50%近い児童が人間関係についての悩みを持っていることがわかった。その多くは「友だちに対して言いたいことが言えない」「友だちが何を考えているのかわからない」「自分の気持ちをわかってもらえない」に集約された。また子ども同士のトラブルの場面に遭遇すると、「私はそんなつもりじゃなかった」「そんなことは言っていない」のように、自分と相手との認識のズレが多いことが非常に多くなったと感じる。つまり「自分の気持ちが相手に伝わっていない」「相手の気持ちが伝わってこない」状況なのである。これは語彙の獲得のできていない低学年に限ったことではなく高学年でも同じ様なケースが多い。相手の気持ちを押し量するという力が弱いと言えるのではないだろうか。

また本校は大規模校でありながら高学年が低学年の世話をする機会が少なく、リーダーシップをとる場面も少ない。登校時の登校班にいたっては1年間同じメンバーで登校しているのにも関わらず名前すら覚えていないことが往々にしてある。地区別児童会や児童会活動でも話し合いが深まることは稀で、意見を求めても「考え中です」「ありません」と答える高学年が多く、低学年はその答え方を真似してしまう状況であった。自分の意見を言うと、周りから何か言われるのではないだろうかという不安を常に持っているため「伝えること」の良さを感じるという経験が少ないと言えるのではないだろうか。

2. ねがい

学校は集団の場である。同学年との関わりも「成長」という点から考えれば大事な要素であるが、異学年との関わりによって大きく「成長」できることがある。例えば朝清掃をしている6年生、あいさつ運動をしている6年生、金管バンドで演奏している6年生を見て、低学年が憧れのまなざしで見ることがある。「私も6年生になったら…」そういう憧れを持つ機会が学校生活の中ではたくさん存在するのである。この憧れが成長に大きく関わることは明らかであり、逆に高学年もその視線を感じて成長できるという面がある。

ところが上記のような実態では高学年に対して憧れを持つ場面は限られてきてしまう。集団生活の中で学ぶべき人間関係が、同学年や対先生との機会に限られてしまうのは非常に残念である。高学年の良さを引き出すことはできないのだろうか。そして、その高学年の良さを低学年が感じ取り、人間関係を学んでいくきっかけにならないのだろうか。

3. 活動のポイント

課題とねがいがはっきりしている以上、目的が達成できるような活動を仕組む必要がある。しかしこれはあくまでも教師主導の実践であり、子どもたちの意識を考慮していない。子どもたちの意識を大切にしながら、ねがいの達成のために学校全体が取り組むことはできないだろうか。

子どもたち自身が問題意識を持って、自分たちでよりよい学校にしていこうと活動して

いく機会が学校生活にはある。それが児童会活動である。子どもたちが自ら課題を持ち、より良い学校生活を築いていくための児童会活動を大切な場として考えることにした。

4. 実践事例

4.1 活動を始めるにあたって

2月に児童会選挙が行われ、3月に児童会を引き継ぎ、本部役員と正副委員長が決定した。本部役員を春休みに集合させ、話し合いの機会を持った。

T1「児童会を引き継いだ訳だけれど、自分なりにこんなことをやってみたいというアイディアがありますか」

S1「昨年のファイルを見て、同じ事をやればいいのかと思った」

S2「何か新しい行事をやりたいけれど、思いつかない」

T2「昨年の児童会を見ていて、一言で言うと、どんな児童会だったと言えますか」

S3「しっかりやっていたと思う」

S4「やる人はやっていたけれど」

T3「では、昨年の児童会のテーマって何だったか覚えていますか」

S5「テーマがあったとは知らなかった」

【考察】

児童の意識の中には児童会活動のイメージが乏しく、自分たちが具体的にどう運営していくのかという気持ちが弱いことがわかる。また昨年までの活動を踏襲していくことが自分たちの責任であるという意識も強い。低学年にとっては児童会活動で何をやっているのか見えにくく、実際に活動している高学年でさえ児童会活動の良さに気づいていないことがわかる。

T4「児童会の活動というのは、子どもたちが自分たちの学校をもっと良くしていこうとすることができる活動なんだよ。でも、今の意見を聞いていると、実際に児童会の活動で何をやっているのかよくわかっていないというのが実状だ。このまま昨年の活動を同じようにやっていたら、児童会の存在が『ただ当番活動をやっているだけ』と受け止められても仕方ない。」

S6「じゃあ、何をやっているのかわかりやすくすればいい」

S7「例えばどんな当番活動をやっているのかアピールするだけじゃ、委員会の紹介を放送でやるだけになってしまう。」

S8「それぞれの委員会でアピールすればいい」

T5「それもいいね。ただ今年の6年生が『児童会でこのことをやった』と胸を張って言えたり、『あの6年生の児童会の時はこんなことをしていたね』と言ってもらえるには、ちょっとどうかな。」

T6「それでは、先生からアドバイスをします。本部役員で今年の児童会のテーマを決めなさい。そのテーマというか目標を宣言して、他の委員会にも協力してもらうという形でスタートします。」

【考察】

実際の経験がないために、話し合い活動も雲をつかむような内容になってしまう。子どもたちに任せる部分は任せ、残りは教師主導で話を進めた。

4.2 大目標の決定と、教師側の願い

このような話し合いを重ね、本部役員では今年一年の活動テーマに「ありがとう」という言葉を選んだ。本部役員の願いは「ありがとう」が学校中にあふれるくらいになるような活動をしていきたい。そうすれば学校がもっと明るくなり楽しくなるはずだ、という期待感があった。そこで教師側からは「素晴らしいアイデアだ。『ありがとう』というテーマを決めたのだから、この言葉が全校に意識されるように、放送や行事などで6年生が『ありがとう』の見本を見せられるように工夫してみよう」と投げかけた。



写真1 本部委員会

コミュニケーションの基本は言葉や態度のキャッチボールである。しかし本校の実態ではあまりにも子どもたち同士の関わりや高学年が見本となって良さを伝えていく場面が少ない。具体の姿をアピールすることによって全校に「人と関わる良さ」を伝えていくことが大切であると感じた。

4.3 デモンストレーション

5月、児童集会を利用して児童会本部より、今年の児童会のテーマが発表された。そして重点活動として「ありがとう大作戦」を行うことが発表された。

「僕たちは、学校中に『ありがとう』という言葉がたくさんあふれるくらいになれば、もっと楽しくて、もっと明るくて、学校に来るのが楽しい！と思える学校になると考えました。（後略）」

と児童会長から説明があり、全校のイメージキャラクター「桐レンジャー」が登場した。友だちに伝えたい「ありがとう」、あの日の「ありがとう」そんなエピソードを放送で紹介していこう、という説明を行った。このままではイメージがわからない恐れがあったので、先生方をお願いして見本を示した。最後に会長から、ありがとう大作戦を行う日が連絡された。



写真2 全校集会での活動説明

児童集会後、本部役員に手応えを聞いたところ「多分

伝わったと思うけれど、何人集まるのか想像できない」「最初は6年生に個人的にお願いしてみないといけないかもしれない」と不安な様子を語っていた。

4.4 第1回「ありがとう大作戦」

学校中にポスターを貼り、いよいよ本番前日になった。役員の方では前日に発表したい人を集合させ、人数が多い場合には審査をしてから発表者を決めるという予定であった。しかし前日に集まったのは6名。役員は落胆していたが、「最初だから仕方ない。この活動が『いいな』と思われるようになったら、きっとたくさん集まるはずだ」と励まし、発表者には細かな打ち合わせをした。誰に伝えたいのか、どんなエピソードなのか、を桐レンジャーがインタビュー形式で聞くこと、最後に、その人に対して真心を込めて「ありがとう」を伝えることを確認した。



写真3 第1回発表者

「休み時間に誘ってくれてとても嬉しかった。Tさんありがとう」

「S君は、必ず僕に挨拶をしてくれる。僕はそんなS君を見習って挨拶ができるようになった。S君ありがとう」

「私が失敗したときに、『大丈夫だよ』となぐさめてくれた。Yさんありがとう」

参加した6名は心を込めて放送で発表した。第1回目の発表後、低学年からは「次はいつやるの?」「私も出たいけどどうすればいいの?」と役員が質問責めにあう場面もあった。本部役員も手応えを感じたのか、次回の日程をポスターに書き、校舎内に貼り出していた。

【考察】

活動を成功させるためには最初が肝心である。しかし、教師が指導して発表させることをしてしまうと、児童の素直な気持ちや、伝えたいという気持ちの半分も伝わらなくなることがある。確認することは最小限にして、児童の力を信じた結果、低学年から参加希望が多く出てきたと言えるだろう。

4.5 第2～5回「ありがとう大作戦」

徐々に参加者が増え、活動が定着してきたことを感じさせた1学期であった。児童の日記の中には「自分たちと同じ学年が考えて始めた活動だから協力したい」という声が聞かれるようになり、特に6年生が積極的に参加するようになった。

「金管バンドで一緒にパートを練習している5年生へ。私がいまいちうまく教えられなくて困っていると思います。でもそんな私の言うことをよく聞いてくれるので、私もがんばろうという気持ちになります。ありがとう」

「図書当番に行くと、いつも4年生が真っ先に仕事をしています。私も見習わなければと反省してしまいます。でも感謝もしています。ありがとう」

のように、他学年へのメッセージを紹介する6年生も増えてきた。また「クラスで人形劇フェスティバルに参加するために全校のみなさんにアルミ缶の協力をしてもらいました。本当にありがとうございました」

とクラスの代表として参加するなど、内容に広がりが出てきた。

しかしながら相変わらず「一緒に遊んでくれてありがとう」「誘ってくれてありがとう」という発表も多く、役員は活動が停滞していることを肌で感じていたようだ。

7月末の役員会では「たしかに参加する人は多くなってきたけれど、同じことを言う人がとても多い」「恥ずかしそうに言うならいいけれど、ただメモを見ながら発表している人は困る」という率直な意見が出された。しかし「俺の弟のクラスでこの前発表した子はヒーローになったって言ってたぞ」「2年のあのクラスでも発表が終わって教室に戻ってきたら拍手が起こったらしいぞ」という情報を得て、また低学年の先生から「ありがとう大作戦に出るとことは低学年にとって、すごいステータスになっているんだよ」と教えてもらい、とにかく続けてみようという気持ちを改めて持った役員であった。

【考察】

たしかに活動はマンネリ化しつつある。内容も「誘ってくれてありがとう」が一番多い。しかしこのことは「あの発表はいいな。私もマネしてみよう」「私にもそういうことがあったな。今度言ってみよう」という気持ちの表れでもある。これは高学年の良さをマネしたり、憧れを持つことに他ならない。たとえ内容が同じであっても「良さ」を感じ合うこと、「伝え合う」良さを感じ合うことにつながってきていると考えられる。

4.6 特集「ありがとう大作戦」

2学期になって、本部役員は「ありがとう大作戦」を続けてみようとする意欲とともに、なんとかしてもっと盛り上げていきたいという気持ちも持っていた。

「このまま、第6回、第7回と同じように続けても発表内容に変化はないかもしれない。ちょっと気分を変えて、特集を組んだらどうだろうか」という意見から2学期のスタートは「運動会特集」「音楽会特集」を行うことにし



写真4 音楽会特集の参加者

た。また開催が月に2回のペースでは準備が大変であったり、特集の意味が薄れてしまうということから、2学期には3回のみ行うことに決定した。運動会の特集では6年生が運動会の華である組体操のことを多く発表した。練習の時の苦労や、友だちから励ましてもらったこと、休み時間に練習につき合ってもらったこと、技が完成してみんなで喜んだこと、など自分の思いを語る6年生。低学年のクラスでは「あの技って簡単そうに見えたけれど大変だったんだね」「一生懸命練習したからすごい技ができたんだね」という6年生への羨望の声があがったという。

音楽会の特集では一緒に練習した仲間へのありがとう、厳しくも温かく指導してくれた

先生方へのありがとう等の発表もあった。1 学期と比べると明らかに内容に広がりが出てきていることがわかる。

また後期の児童総会では本部役員を中心としたこの活動に対して、「とてもよい活動だと思う。ぜひ続けて下さい」という応援メッセージが多く寄せられたことから、全校の中に確実に「ありがとう大作戦」が意識されてきたことを役員も実感できた。

4.7 児童の発表の変化

この活動がスタートした当初は、「誘ってくれてありがとう」「一人でいたときに遊んでくれてありがとう」という内容がほとんどであった。内容についての指導は行わず、どれくらい活動が広がっていくのかを見守ることにした。

まず変化が起こったのが 3,4 年生である。「発表してみたい」「発表に挑戦してみたい」という気持ちが起これ、内容は「誘ってくれてありがとう」に近いものだが、多くの児童が以前発表した高学年のマネをするようになったのである。この変化は 1,2 年生において顕著である。全校放送の場で発表することは、大人が考えている以上に難しいものである。しかし 1,2 年生の中には、発表できた児童がヒーローになれるという雰囲気がある。活躍の場を求めて参加を希望する児童が徐々に増えてきた。そして最後の変化は 5,6 年生である。1 学期の途中から「また誘ってくれたシリーズか・・・」というつぶやきが聞かれるようになったのだが、裏を返すと「もっと違うことで発表できないだろうか」という児童の願いでもある。特に 6 年生の中には本部役員の「ありがとうを紹介することで、いいなあと思う行動が学校中に増えていくだろう」「お互いにありがとうが言えたらもっと仲良しになるだろう」という願いを感じ取り、もっと良い発表ができないだろうか考える児童もいた。同時に前回までの発表を聞き、発表の良さを感じ取った児童も多い。声の大きさ、目線、内容などをマネして発表する児童が増えてきたことが何よりの証拠であろう。

小学校の教育活動では他者から大きく影響されることがある。人が成長する上でマネをするということがどれだけ大きな要因であるか計り知れない。この「ありがとう大作戦」でマネをするという行為が広がり、内容が広がっていった要因を考えると以下の点にまとめられるのではないだろうか。第一に、繰り返し同じ活動を続けたことで、自分が参加する時のイメージを持ちやすく、参加しやすい雰囲気ができたこと。第二に、日常的な生活の中から自分たちの伝えたい「ありがとう」が話題になっているので、自分でも同じ「ありがとう」をやってみようかなという気持ちを持つことができること。第三に、テレビ放送で行ったことにより、発表者の話し方・声の出し方・目線・表情などを細かく観察することができ、マネしてみようという気持ちを持ちやすいこと。

4.8 児童の発表事例（文中の氏名は仮名）

- ・ぼくは同じクラスの賢治くんにありがとうを言います。賢治くんは、この前僕がケガをして雑巾をしぼることができなかったときに、「かして」と言ってしぼってくれました。

- ぼくはうれしかったし、やさしいなあと思いました。賢治くんありがとう。(1年男子)
- ・私は陽子さんにありがとうを言います。私が忘れ物をしてしまって困っていたら「いいよ」と言って貸してくれました。ありがとう。(2年女子)
 - ・同じクラスの拓也君に伝えます。僕が毎朝、あいさつをすると必ず目を見てあいさつをしてくれます。ぼくはそれが楽しみで毎朝拓也君にあいさつをします。拓也君、ありがとう。(6年男子)
 - ・同じクラスの優子さんと光さんへ言います。いつも遊んでくれるし、悲しいことがあったらなぐさめてくれます。2人のおかげで毎日学校で楽しく過ごすことができました。ありがとう。(6年女子)
 - ・私は3年間合唱団で頑張ってきました。時にはやめたいと思ったこともありました。でも、今思うと頑張ってきて良かったなと思います。厳しくても優しく指導してくれた神尾先、野口先生、大島先生、そして合唱団のみんな、本当にありがとうございました。来年のコンクールでも頑張ってください。(6年女子)
 - ・私と同じ金管バンドで同じパートをやっている志帆さんへ。志帆さんはいつも練習前にイスを並べてくれたりします。発表の時にもがんばろうねと声をかけてくれます。私は志帆さんと一緒に練習できて本当によかったと思います。ありがとう。(6年女子)
 - ・私は最後のコンサートで、6年生代表としてトロンボーンをやりたいけれど、あまり練習も出ていないし、自信もなかったから立候補できませんでした。そしたら3組の明里さんが「今からでも一生懸命やったら、先生達もわかってくれるよ」と励ましてくれました。その言葉で私はがんばりました。おかげで発表もできたし、最高の思い出もできました。明里さんありがとう。(6年女子)
 - ・僕は児童会の仕事で登校班コンテストのアンケート用紙を作っていました。全部の班長に書いてもらうので、学校の登校班名簿を全部調べて、班長の名前を用紙に書くことをしなければなりません。でも班長の数はなんと150人以上いました。作業がなかなかできなくて、それでも必死にやっていたら恭平君が手伝ってくれました。僕は本当に助かったし、困っている時に声をかけてくれたこともうれしかったです。恭平君ありがとう。(6年男子)

【考察】

これらの事例は、2学期最後の第8回「ありがとう大作戦」で発表されたものである。内容に深まりが出てきたことがわかる。第一にエピソードのようなものが詳しく説明されるようになったこと、第二に相手の行為に対して自分がどう感じたのか、というありがとうの中身にせまる内容が増えてきたことである。



写真5 1年生の発表

多くの発表を聞き、どんな発表ならば気持ちが伝わるのか、どう伝えれば聞いている人にも状況がわかってもらえるのか、児童はそういう大切なことを学んできたのであろう。

さらにこの第8回では1年生が4名も参加した。驚いたことに、誰も原稿を持たずにしつかりとカメラを見ながら発表したのである。高学年は大いに刺激されることになり、「あの1年生はすごい」「原稿なしで発表するとよくわかるし気持ちも伝わる」と大絶賛された。高学年の良さを全校に広げていくというねらいばかりを強調していたのだが、低学年の良さが全校に良い刺激を与えることになった。

これらのことから考えても、発表の機会が増えること自体が全校としての高まりにつながっていくのであると言えるであろう。

4.9 「ありがとう大作戦」の影響

4月から行ってきたこの活動で、大きな変化が起こってきたクラスがある。あるクラスでは、「ありがとう大作戦」でどのような伝え方をすればよいか、という作文の授業を継続したことで、児童の文章力が飛躍的に伸びたことが報告された。同じように、「ただありがとうを伝えるだけではなく、エピソードがわかるように表現する」という指導をした先生からは、「エピソードを紹介することで全校に『ありがとう』の中身が伝わり、自分も真似してみようとか、人の良さに気づくきっかけになる」と報告された。

1学期は「先生が卒業までに1回は参加しろって言っていたから」という理由で参加していた児童が、「先生、こんな内容で発表してみたいけれど、下書きの原稿をチェックしてくれますか」と相談に来ることもしばしばであった。本部役員の意気込みを感じて、3回4回と参加した児童もいる。余談だが短い発表の時間にいかにエピソードを伝えるかという課題は、卒業文集の制作にも大いに役立つことになった。

4.10 良好な人間関係を築いていくために

本活動の最大の目的は「良好な人間関係を育む」ことである。筆者が行ったアンケートの結果で、「自分の気持ちが相手に伝わらないこと」「相手の考えが理解できないこと」が本校児童が悩む人間関係の大きな要因であったことは先に述べた。この「ありがとう大作戦」を通して、児童の姿から次のことが言えるのではないだろうか。第一に、行為の良さを真似しようとする気持ちを持たせることができたことである。良い行為を具体的に紹介し合い、広げていくことができたと考えられる。第二に、一人ひとりが認められる環境作りができたことである。本活動では必ず発表者が存在し、相手が存在する。テレビ放送で紹介してもらい「ありがとう」を伝えられた児童は、全校から認められたことと同じである。第三に、発表の機会が数多く存在したことで全校に良さが広がっていったことである。目線、話し方、言葉遣い、言葉の表現など、回を重ねる毎に発表者がレベルアップしていくことがよくわかった。発表を聞き、見て、良さを取り入れる、そういう学び方を児童はしていくものである。これらの効果が認められたと筆者は感じている。この効果がなぜ「良好な人間関係」につながっていくのか述べてみたい。

学校生活は集団生活の場である。お互いに影響を与え合い成長していくものである。筆

者が行ったアンケートの内容を詳しく分析すると、高学年の多くは「相手に気を遣い、言いたいことが言えないというストレスを感じている」「相手の反応が怖くて言い出せない」という悩みを抱えていることがわかった。これらを解決していくためにはアサーティブな言い方をトレーニングする等の活動も効果的であろう。しかし、先にも述べたように、学校生活の良さは、友だちの行為を直接的・間接的に見たり聞いたりすることができ、その行為から学ぶことが出来る点にある。学習に関しても、多くの友だちの考え方に触れることで自分の考えに広がりや深まりが生じると筆者は考えている。

児童会本部が中心となって進めた「ありがとう大作戦」とは、まさに全校放送で発表を見て、聞くことで、人間関係を学んでいく機会を与えたと言えるのではないだろうか。そして自分の気持ちを伝えることの良さを実感したり、相手の気持ちを感じ取ったりするコミュニケーションの基本を間接的に経験できる場であったと言えるのではないだろうか。

4.11 これからの課題

感謝の気持ちを伝え合うことは、ある意味プラスのキャッチボールである。発表を聞いている側にとっても気持ちの良いものである。しかしながら、児童生徒が本当に困っているのはマイナスのキャッチボールと言えるかもしれない。ここで6年生のH女の作文を紹介したい。

「私は、人の前で発表するのは苦手です。今でも苦手です。友だちにも言いたいことが言えなくて嫌なことがあると先生に相談していました。自分で言うと仲間はずれになるんじゃないかとか、もう遊んでくれないんじゃないか、と不安になるからです。友だちがおはようって言うてもタイミングが悪くなるとおはようと言えないこともたくさんありました。でも夏休みの前に先生から『いい作文だから発表してみるといいよ』と言ってもらったので、思い切ってありがとう大作戦に出してみました。カメラを向けられると足が震えました。声も震えました。でも組体操の時に励ましてくれたY子さんへの気持ちをがんばって発表しました。教室に戻ってきたら恥ずかしくてY子さんの顔を見れませんでした。でもY子さんが『発表してくれてありがとう』と恥ずかしそうに言ってくれたので、私は泣きそうになってしまいました。発表できたのも自分では頑張ったと思うけれど、私にとって言いたいことが言えたことがうれしかったです。」

自分の気持ちを伝える良さ、自分の気持ちが伝わった良さ、相手の気持ちを感じる良さ、これらの良さを感じるということは、良好な人間関係を築いていくための大切な基幹部分を体験したと言えるのではないだろうか。

文献

草間信一，土井進，2007，集団適応と人間関係作りをねらいとした小学校低学年集会の実践，信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要・教育実践研究，8，pp.93-102

(2009年6月29日 受付)